Japanese Society of Physical Education

021119

スポーツ活動の実態と意識に関する国際比較研究(3)

～日本・西ドイツの大学生の調査～

○鬼塚幸一、　多々納秀雄、　小谷寛二、　岡田　猛、　武隈　晃、
（鹿児島工業高等専門学校）（九州大学）　（水産大学校）　（鹿児島大学）　（鹿児島大学）

国際比較、日本、西ドイツ、スポーツの活動、スポーツ意識、価値意識

はじめに

スポーツの持つ機能の一つとして諸外国との国際理解の促進がいわれるが、その割にはスポーツをめぐる彼我の実態についてそれほど明らかにはされていない。国際比較に関しては、諸外国の実態の一面をとりあげて、過去あるいは現在の我国スポーツの実状に対する徒らな礼賛、あるいは徒らな否定や卑下に終始することが多かったのではないかと考えられる。

そこで、本研究では社会体育の先進国である西ドイツとの国際比較によって、日本人のスポーツにみられる行動特性、そしてそれらを規定するスポーツに対する態度や価値意識などの特徴を明らかにすることにしたい。

研究方法

対象；日本は九州地区の国公私立の大学生、男子278 名女子180 名、合計458 名で有効回収率93.2%であった。一方、西ドイツはニーダーザクセン州のオルデンンブルグ大学生、男子130 名、女子61名、合計191 名で有効回収率38.2%であった。

手続；日本及び西ドイツ共1985年12月に、「スポーツに関する調査」を用いて質問紙法によって調査した。調査の内容は、対象者自身について８項目、スポーツの実施状況と関心について１９項目、スポーツへの態度・価値意識についてなど５要因で構成されている。

結果と考察

1）　体力の程度及び健康への注意は男女共に日本より西独が高く、運動不足感を認めるものは西独より日本が多かった。

2）　重要なる他者については、日本の学生の半分以上が「父・母の奨励」を受けてスポーツを行っている。それに比べ西独はあまり奨励されていない者が多かった。他者の期待についての「家族」「友人」「地域の人」などいずれの項目についても西独より日本が期待を感じている。最大の影響を与えた人では、「友人」が最も多く両国で共通していた。

3）　スポーツの実施程度は、「週に２～３日以上」とする者が西独で50%以上となり、日本の男女より10%も多くなっていた。その内容として、日本では「競技的スポーツ」志向が多く、西独では「比較的軽いスポーツや運動」と「野外スポーツ」への参加者が多い。

4）　「新聞のスポーツ欄」「テレビのスポーツ番組み」「スポーツ大会や行事の観戦」の間接的スポーツ参与ではいずれの項目においても西独より日本が高い。

5）　スポーツをする時の障害では、「時間の不足」が最も多く、特に西独は６割以上にのぼる。その他に日本では「施設の不足」「仲間の不足」「健康・体力」「スポーツ技術」が、そして特に女子では「スポーツ技術」が顕著に多くなっている。西独はそれらの項目で低い値となっていた。

6）　クラブ所属については、日本の男女共に「大学のサークル」が最も多く、その他の項目では少ない。西独は「大学のサークル」「地域のクラブ」「個人経営のクラブ」などにそれぞれ多数の者が所属しており、多様化が特筆される。

7）　「週に１日以上」のスポーツ実施者の状況について述べると、日本の場合は楽しみ，健康・体力を目的とし、学校施設を使用し、学校の友人だけを仲間とし、平日の昼間・夕方と休日の昼間が時間帯であり、２～３時間の練習量で、ゲームと基礎練習を中心とした内容である。一方、西独は技術より運を重視する身体活動，楽しみ，健康体力，緊張解消，などを目的とし、学校，公園・広場，野外施設などを使用し、学校の友人，地域のクラブの友人，一般の友人などを仲間とし、時間帯としては平日の昼間・夕方，休日の昼間，特に平日の夜間の利用が多い、30分～２時間の練習量で、内容は準備・整理運動や基礎練習を重視し、ゲームをする者は少ない。スポーツの捉え方や状況において、両国では顕著な差異が認められる。

8）　スポーツに対する態度では、「快感情」において両国の男女共差がみられないが、西独では「不快感情」を否定するものが多い。

9）　スポーツに対する信念では、「身体的」「精神的」「社会的」側面のいずれも日本の男女が西独に比べ高い値となり、強い信念がみられた。

10）　スポーツに対する価値意識では、「精神・鍛錬主義」「国家主義」「全力主義」などで日本の男女共に高い値となり、両国で顕著な差がみられた。「日本人的」な価値意識が伺える。

11）　スポーツにおける日本的価値観では、「甘え主義」「恥・義理意識」「タテ社会主義」などで日本が高く両国の差が顕著であり、またその他のいずれの項目でも日本が高い。いわゆる日本人的特性が存在していることが明らかにされた。

まとめ

日本のスポーツについて諸外国と比較して、従来からいろいろ言われたが、今回の西独との比較研究を通じて、これらのことがらについての実証的な調査研究の必要性をさらに感じた。

NII-Electronic Library Service